

生育は早い。必ず茎数を確認し、中干しは早めに開始

【管理のポイント】

- 中干しにより無効分けつの発生を抑え、適正な穂数を確保する。また溝切りを合わせて行うことでほ場の地耐力を向上させコンバイン収穫を容易にするとともに、登熟後半の効率的な水管理が可能となる。
- 中干しは必ず田植後25日までに茎数を確認し、目標穂数の7割で落水する。（「コシヒカリ」の中干し開始適期の茎数のめやす 50株植で17本、60株植で14本）
- 中干しは出穂1か月前までに終了し、その後は飽水管理を実施し根域と地耐力の確保に努める。

1 中干しの程度と終了時期

- 溝の間隔は8～10条おき（間隔は2.5m程度）、深さは10cm以上とし各溝の末端は必ず排水溝につなげましょう。
- 水を水田全体に効率よく回すことができるよう溝切りは必ず実施してください。溝切りによって、かん水や排水が容易になります。
- 中干しは、田面に小ヒビ（幅約1cm程度）が入り、軽く足跡がつく程度とします。
- 例年倒伏するほ場や大豆跡等、生育過剰となりやすいほ場では「強めの中干し」を実施しましょう。
- 中干しの終了時期が遅くなると根の張りが不十分となり、高温や乾燥の影響を受けやすくなるので、**出穂1か月前（早生：6/25頃、コシヒカリ：7/4頃）までに終了**しましょう。



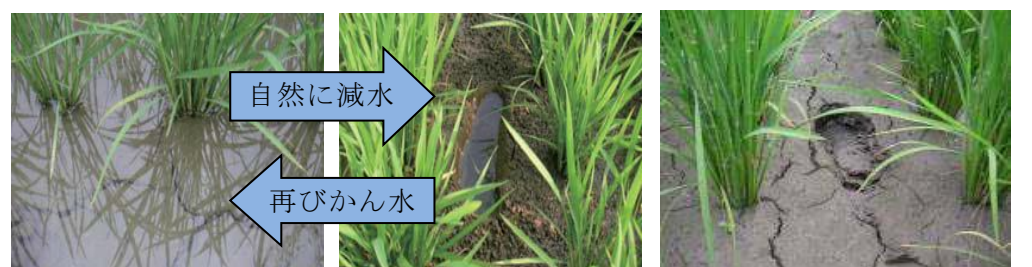
【溝の末端を排水口に接続した状態】

【適正な中干しの状態】

2 中干し後の水管理＝飽水管理

- 中干し終了直後は、浅水の間断かん水を実施し、その後徐々に飽水管理（田面や足跡や溝に水が溜まっている状態）へ移行します。飽水管理で、出穂後の根の活力を維持します。

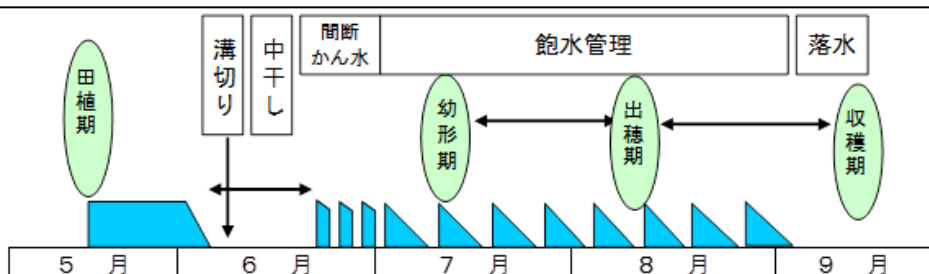
【飽水管理の方法】



かん水 (3～5cm)

飽水管理の状態
(足跡に水がある)

× 乾かし過ぎの状態
(かん水必要)



3 定期的な畦畔・農道等の除草の実施

- 定期的な草刈りは、斑点米発生防止及び畦畔の景観維持につながります。
 - ・ 直近の病害虫発生予察調査で斑点米カメムシ類の発生が確認されています。定期的な草刈りは斑点米カメムシ類の耕種的な発生防止対策となります。
 - ・ カメムシ類の餌となるイネ科を中心とした雑草が結実する前に実施することがポイントです。**6月上旬以降、3～4週間隔で除草を実施**しましょう。刈草を残すと斑点米カメムシ類のすみかとなります。早めにほ場から処分しましょう。

4 穂肥診断について

- 穂肥診断については、必ずほ場ごとに幼穂の長さを確認しましょう。
- **1回目の穂肥施用は、必ず草丈・茎数・葉色を調べ、生育診断を行い、時期と量を判断し実施**しましょう。
- なお、穂肥の施用に当たっては、**葉色が濃いほ場は施用時期を遅らせる、施用量を少なめにするなど、それぞれの稲の生育量に応じて、時期と量を加減**しましょう。
- もみ数過剰は品質低下につながります。1回目の穂肥が早すぎたり多すぎると、もみ数過剰や倒伏が助長されます。極端に生育量が大きかったり葉色が濃い場合は1回目の穂肥は見送りましょう。
- **5月10日頃移植の「新潟次郎」（飼料用）、「つきあかり」は6月20日頃から1回目の穂肥時期となります。収量を確保するために遅れずに施用**しましょう。
- 有機質入り穂肥は、有機物の種類によって肥料効果や肥効が現れるまでの時間が異なります。有機物の種類に留意し、施用量や施用時期を検討しましょう。

【品種別穂肥施用時期及び量】 平坦地 5/10頃移植の場合

品 種 名	1回目穂肥 出穂前日数	2回目穂肥 出穂前日数	2回合計窒素量 (10a当たり)	出穂期の めやす※
新 潟 次 郎	25～30	14	6kg	7/19頃
つ き あ か り	25～30	14	3～3.5kg	7/21頃
五 百 万 石	20	12	1～2kg	7/23頃
わ た ぼ う し	22～20	12～10	2～3kg	7/25頃
こ し い ぶ き	23	14	2kg	7/28頃
こ が ね も ち	18～15	10	1～3kg	8/2頃

※出穂期は今後の天候で変わる可能性があります。

次回6月21日発行予定